

ちえおくれの子どもと幼稚園

津 守 真

精薄児と判定されたり、肢体不自由児や盲児など身体に障害のある子どもは、幼児期から、特殊な専門の教育機関で指導された方がよいという考え方が近代的、科学的な考えであると思われがちである。幼稚園の関係者も、たくさんの人がそう思っているのではないだろうか。

近ごろは、三歳児検診が行なわれたり、相談機関も普及してきているので、一般の基準と照して発達のおくれを指摘されることも多くなってきている。ひとたび精薄児と診断されると、親も先生も普通の幼稚園にはいれられないと思ってしまう。

また、幼稚園で手こずる子どもがいると、どこか子どもにも異常があるのではないかと相談機関にまわし、IQテストの結果などをみて、やっぱり普通の幼稚園ではむりな子どもだったと幼稚園を断わる理由とされてしまう。

実際にこうして幼稚園からはねのけられる子どもをみていると、その中のかなり多数のものが普通の幼稚園でやってゆける子どもたちである。少なくとも幼児期には普通の幼稚園でやっていった方がよい子どもたちである。もう少し長い目でみるか、あるいは、幼稚園の受け入れの条件をとどのえるならば、もっと多くの子どもが普通の幼稚園でやっていけるであろう。では、このような問題について、幼稚園教育のとりくむべき問題は何であろうか。

一、幼稚園には、いろいろの子どもがいることがどの子どもにも益になるという原則的な考え。(1)——優秀な知能の子どもだけを集めて、その優秀さだけを対象にして教育のプログラムを考えたら、偏った教育になる。頭がよく、よい成績をとることを誇りとし、頭のわるい子を見下したり、違う世界のもののように考える

子どもになったとしたら、幼児のうちから、人生の方向がずれてしまうことになる。また、頭のよさだけを促進させるような教育プログラムを考えたとしたら、全人をあげて遊びに没頭する幼児期のたのしみを奪ってしまうことになる。幼稚園は優秀さだけを対象にするのではない。幼児期の教育は全人教育でなければならぬ。

二、幼稚園には、いろいろの子どもがいることがどの子どもにも益になるという原則的な考え(2)——頭がよいかわるいか、というようなことを基準にして人を見ろというのはおとなの見かたである。子どもにとってはどの子どもも友だちである。ことばがしゃべれない子どもとあそぶときには、どうやって遊ばよいかを考えて、それに合わせることはする。しかし、その子が頭わるいかどうかという問題は無い。優秀な子どもは、ことばがきけなかったり、歩けなかったりする子どもといっしょに生活し、あそぶことによって、その子どもたちを知り、友だちになることができる。世の中にはいろいろの種類の人がいるのであって、幼稚園にもいろいろの子どもがいて、どの子どもとも友だちとして遊べる経験をしておくことがむしろ当然であろう。そうでないと、自分と違った種類の子どもと触れたときに、どうしたらよいかわからなくなり、極端にきらったりすることになる。幼稚園には、頭の優秀な子どももいるし、頭のわるい子どももおり、身体の不自由な子どもも一人二人おり、目の見えない子どももときには

入ってくるというような状態を原則とすべきであると思う。

三、幼稚園は多くの個人差を包みこめるような生活を作り上げることが課題である。——ちえおくれや身体の不自由も、いろいろの度合があるので、いわゆる普通児との境界は明瞭でないし、普通児といっても、能力も性格もさまざまである。幼稚園は、いろいろの子どもがむりなくいっしょに遊べるような場所でないならぬ。あまり多くの規則があったり、一部の子どもしかたのしくついてゆけないような課題が多かったりすると、特定の子どものみしか適応できない社会になってしまう。優秀な子どもも、障害のある子どもも共に十分に力を発揮して生活できるのは、自発的な遊びを根幹とした生活である。

四、クラスの人数、担当教師、クラス別けなど、教育条件をととのえることが課題である。——しかし、現状の幼稚園は一般によい環境にあるとはいえない。一クラスの人数が四十人というのはどんな場合でも、幼児の集団としては大きすぎる。また、ちえおくれや身体の不自由の度合によっては、一般のクラスよりもっと小人数のクラスが必要な段階もある。そして、大きなクラスに入った場合にも、特別な担当者ある期間つけるような仕組みになれば、理想的であろう。(これは、大学などとの連絡をとってゆけば容易な道である)

まだ多くの課題があるが、今後、幼児教育が正しく発展するために、解決してゆかねばならぬ課題であると思う。